

光遠院惠空講師略年譜

經
隆
優

目次

一	はじめに	(九六)
二	惠空関係資料一覧	(九六)
	(一) 伝記資料	(九八)
	(二) 伝記記載文献	(九九)
	(三) 典籍関係資料	(一〇〇)
	(四) 関係論文	(一〇一)
三	惠空略年譜	(一〇二)
四	惠空撰述関係一覧	(一一五)
	惠空写伝本一覧	(一一五)
付	資料翻刻	(一三〇)
	『惠空老師行状記』	

一 はじめに

近世・近代における真宗大谷派の教学を中心とした学事の動向についての研究は、「歴代講師」各々についての研究ぬきにはなされえないといえよう。そこでまず、たとえば『御学寮系譜並講本録』（安政三年）、『三講者名譜』（明治三十四年刊『真宗高倉大学寮沿革略』所収）、『三講者名譜』（大正十四年刊『真宗大系』三十七卷所収）等において、常に初代講師として位置づけられている惠空に研究の的をしばった。

惠空の伝記資料、あるいは著述関係等の資料の大部分は、その生れ寺である善立寺（滋賀県守山市金森）に所蔵されている。大谷大学図書館に所蔵されているものは、その一部分にしかすぎない。またその所在が不明な資料も数多いようである。そのため収集しえた資料よりも、逆に未収集の資料の方がどれほど多いことかと思われる。

しかしながら、惠空の事蹟についてのアウトライン的なものだけでも押えることのできる一覧をつくることができらるならば、今後の研究に少しは役立つのではないかと考え、収集しおえた資料に基いて惠空の年譜を草した。合せて、今後の惠空研究のための資料となるべく、惠空関係資料の一覧、また惠空の著述等に関する資料等々をも一覧したことである。

なお、巻末の「付 資料翻刻」は前田一郎資料整理員が担当した。

二 惠空関係資料一覧

惠空の伝記関係資料、伝記記載文献、典籍関係資料、そして惠空研究論文関係資料は、後に一覧するとおりである。

伝記資料の中でその最も基礎になっていると考えられるのは、恵空の没約一ヶ月後の享保七年一月にその高弟の西蓮寺恵暁が草した『恵空老師行状記』である。恵暁の原本の所在は不明であるが、現在、善立寺には、これの義空（恵空の甥）書写本（明和三年書写）が伝えられており、今回、善立寺様のご協力を賜ってそれに目を通すことができたことは、大変な喜びであった。その結果、大阪慈雲寺の嗣講江村秀山（二八四四—一九〇五）草『慧空講師伝』は、この『恵空老師行状記』に依り、これを修文して記したものであるということがはっきりした。（相方の相違点は、本年譜の最後の註記に記した。）また、暁烏敏著の『恵空師略伝』は、著者が跋文に記してあるとりに江村秀山草『慧空講師伝』に依って記されたもので、同じ内容である。また、『真宗大谷派三講者便覧』における恵空の章は、伝記的にはごく簡単なものでしかなく、主に恵空の開講講義名や典籍名等が詳細にまとめられている。

また、武田統一著『真宗教学史』（二二七頁）に、「西福寺恵敵は彼が先住である恵空の行状記、即ち『恵空老子行状記』を見え出し筆録抄写し終って、『得岸和上一期記』と表題を付けたのは、明和六年八月十五日のことである（『同書』奥書大）」とあって、恵空の伝記資料として、もう一つ『得岸和上一期記』なるものがあるようである。宗学院蔵書は、現在大谷大学図書館に移されており、従ってこの『得岸和上一期記』もこの中にある。しかし、宗学院蔵書は未整理のため、公開されるにはいたっていない。武田統一著の『同書』（二二七頁）には、「恵敵は前書に「自今已往寮内、緇林、而遣預汝」とあるのを、「自今後学寮、万事巨細属汝」と書き改めた」云々とあることでもあり、そのことから考えるならば、『得岸和上一期記』なるものを見ることによっては、恵空の事蹟は、若干変わるのではないかとも思われる。

恵空は、初代講師として位置づけられているため、その伝記的な記述文章は非常に多くある。しかし、ここではそ

の伝記的な記述の載せられてある文献の主なものだけをあげるにとどめておく。

典籍関係の資料は、後に一覧するとおりであるが、これらの資料の上にあらわれていない数多くの典籍がまだ善立寺に蔵されているようである。(善立寺住職談) また、典籍関係の目録類で注意をしなければならないのは、全く同じ字名の別人がいて、その別人の典籍をも恵空のものにしてあげてあるものがあることである。その別人とは、「紀伊和歌山浄福寺の学匠。明暦元年生る。其先は能登の人、木曾を姓とし、民部卿某の後なりといふ。内外両典を究め、寛文・延寶より天和に亘りて著作する所少からず。」(龍谷大学編『仏教大辞彙』第一卷三四二頁) という人物であり、『国書総目録』(岩波書店、昭和五十七年版) には、恵空の典籍と、この別人の典籍を混同してあげてある。

恵空についての関係論文であるが、その研究はあまりなされていないようで、研究論文等の文献はきわめて少ない。その数少ない論文をここにあげておく。

(各資料の最後の「」カッコ印の標示は、本年譜ならびに撰述関係一覧・写伝本一覧の典拠資料名の欄で用いた略称である。)

(一) 伝記資料

『恵空老師行状記』 一卷

西蓮寺恵暁 享保七年一月二十二日撰

義空 明和三年十二月六日書写 善立寺蔵 [空状]

『得岸和上一期記』 一卷

西福寺惠敏 明和六年八月十五日撰 大谷大学図書館蔵

『慧空講師伝』

江村秀山草

『真宗全書』 大正五年刊、「大谷派講者列伝碑文集」所収〔師伝〕

『惠空師略伝』

暁烏 敏著

『惠空語録』 所収、明治四十二年刊〔略伝〕

『光遠院惠空』

東本願寺宗学院編集部編

『宗学院編集部報』 第二十二号 昭和十四年刊、「真宗大谷派三講者便覧」所収〔便覧〕

(二) 伝記記載文献

『真宗大谷派学事史』 (『統真宗大系』二十卷所収 昭和十六年刊)

『大谷派本鬘沿革略』 (『真宗大系』三十七卷所収 大正十四年刊)

『真宗高倉大学寮沿革略』 (真宗高倉大学寮編 明治三十四年刊)〔沿革略〕

『真宗教学史』 (武田統一著 昭和十九年刊)

『真宗学史稿』 (廣瀬南雄著 昭和五十五年刊)

『真宗全史』 (村上專精著 大正五年刊)

『日本仏家人名辞書』 (鷲尾順教著 明治三十六年刊)

『仏教大辞典』 (望月信亨著 昭和七年刊)

『仏教大辞彙』 (龍谷大学編 昭和四十八年刊)

『真宗大辞典』 (岡村周薩著 昭和十一年刊)

『真宗辞典』 (河野法雲・雲山龍珠監修 昭和十年刊)

『真宗新辞典』 (真宗新辞典編纂会 昭和五十八年刊)

(三) 典籍関係資料

『浄土真宗教典志』 (『大日本仏教全書』一卷所収 大正十年刊) (典志)

『真宗聖教刊行年表』 (『真宗全書』所収 大正三年刊) (刊行年表)

『真宗聖教現存目録』 (本願寺派宗学院編 昭和五十一年刊) (真聖)

『真宗学匠著述目録』 (井上哲雄編 昭和五年刊) (真匠)

『大谷派先輩著述目録』 (住田智見編 大正十四年刊) 『真宗大系』所収 (先著)

『大谷派先輩著述目録補遺』 (武田統一編 昭和十六年刊) 『続真宗大系』所収 (先著補)

『大谷派学事史略年表』 (真宗典籍刊行会編 昭和十六年刊) 『続真宗大系』所収 (略年表)

『大谷大学図書館和漢書分類目録』 第一・二・三目録 (大谷大学図書館編 大正十五年・昭和十年・四十四年刊)

『香月院文庫目録』

(大谷大学図書館編 昭和四十五年刊)

『円光寺文庫目録』

(大谷大学図書館編 昭和四十七年刊)

『浅野長量師寄贈典籍目録』

(大谷大学図書館編 昭和四十九年刊)

『国書総目録』

(岩波書店 昭和五十七年刊)〔国総〕

『恵空師二百年忌記念展覽目録』

(善立寺 大正十三年)〔展出〕

(四) 関係論文

「恵空師の漢語燈録」

今岡松庵

(『宗教界』第十三卷—十二号、第十四卷—八・十一号・大正四・五年)

「光遠院恵空講師」

橋川 正

(『大谷学報』第九卷—三号・昭和三年十月)〔学報〕

「恵空」

橋川 正

(『野州郡史』下卷・昭和二年刊)〔郡史〕

「恵空校合建暦版選択集について」

石井教道

(『浄土学』第三号・昭和十三年八月)

「草創期に於ける大谷派宗学の史的考察」

岡崎正謙

(『宗学研究』第四号・昭和七年)

「厭離穢土から欣求浄土へ」

大桑 斉

——惠空にみる真宗教学の近世的展開——（『日本宗教史研究2——布教者と民衆との対話1』・昭和四十三年七月）

三 惠空略年譜

〈凡例〉

- 一、本年譜は、『惠空老師行狀記』（惠暁撰、善立寺所藏義空書写本）を中心として、これと『慧空講師伝』（江村秀山草）、『惠空師略伝』（晚鳥敏著）等の伝記資料を対校し、さらに先に一覽した関係資料と左記の資料とを参照し、また奥書等によって撰述、書写の事蹟を加えて作成した。
 - 『粟津日記』（大谷大学図書館蔵 粟津文庫）
 - 『上首寮日記』（大谷大学図書館蔵）
 - 『粟津日記』は『粟津』、『上首寮日記』は『上首』の略称を用いた。
 - 一、『惠空老師行狀記』と、『慧空講師伝』、『惠空師略伝』等との記述の相違点は、年譜中のその項の右上に※印をつけ、詳細には年譜の最後に註記した。
 - 一、『先掲の「関係資料一覽」にある資料を典拠文献としたものは、略称で記した。
 - 一、『資料名の次の「序」は序文、「跋」は跋文、「奥」は奥書を意味する。
 - 一、巻首題下にある記載の場合は、首題下とあらわした。
 - 一、『大谷派学事史略年表』によったものは、その「典拠資料名—略年表」という形であらわした。
 - 一、『野州郡史』下巻、『大谷学報』第九卷三号等の橋川正著の論文に引用されている資料を典拠としてよったものには、その「資料名—郡史」、「資料名—学報」等とあらわした。
- 一、月日・季節のはっきりしている事蹟は、それを記し、順番に並べ、その不明な事蹟は、——であらわしその年の最後に記した。

西暦	和号	年令	月日	事蹟	典拠文献
一六四四	正保一年	一歳	五月十五日	近州野州郡金森（現在の滋賀県守山市）善立寺に（父は信空・母は妙善）誕生する。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
一六五八	万治三年	十五歳		これより以前に家兄と死別する。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
一六六〇	万治三年	十七歳	十一月十一日	『山雲海月集』一卷を書写しおわる。	〔山雲海月集奥―郡史・学報〕
一六六一	寛文一年 （四月二十五日改元）	十八歳		比叡山にのぼり天台宗の学問を志す。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
				『末法燈明記』一卷を書写する。	〔末法燈明記奥―郡史・学報〕
				『十七條憲法下学集』一冊を書写する。	〔十七條憲法下学集奥―郡史・学報〕
一六六三	寛文三年	二十歳		真宗への因縁に催され、比叡山をおり郷里に帰り、湖東の龍溪に師事して宗学を志す。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
一六六四	寛文四年	二十一歳		『正信偈文林』を撰述する。	〔国総〕
一六六七	寛文七年	二十四歳		『浄土釈疑集』二巻を撰述する。	〔浄土釈疑集序〕
一六六九	寛文九年	二十六歳	六月 十二月中旬	これより先に京都に入り、誓願寺円智の門に入り宗学を学ぶ。そして大津、京都の高倉に服膺して、この時、円智所蔵の『存覚一期記』を書写する。	〔惠空本「存覚一期記」奥〕
一六七〇	寛文十年	二十七歳	二月	一説に、比叡山よりおりて以後、大阪の光徳寺に法務を手伝い、その門徒高木宗賢の世話で入京、円智の門に入るとある。	〔大谷派学事史〕〔略伝〕
一六七一	寛文十一年	二十八歳	十月	誓願寺円智の推薦によって本山に出堂給仕することとなる。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
一六七二	寛文十二年	二十九歳	一月	本山の祖堂での法話を命ぜられる。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
				『観経疏玄義分』を講ずる。	〔観経疏玄義分〕

西曆	和号	年令	月日	事蹟	典拠文献
一六七三	寛文十三年	三〇歳	二月五日 七月	『三帖和讃科』一卷を撰述する。 『観経玄義分傍證』一卷を撰述する。 『観経玄義問解』一卷を撰述する。 『浄土疑問解』一卷を撰述する。 『浄土和讃二十一首抄』一卷を草する。	〔浄土疑問解奥〕 〔浄土和讃二十一首抄奥〕
一六七五	延宝三年	三十二歳	九月二十五日 五月五日 六月二十三日	『念仏往生要義鈔』・『自要鈔』・『選要鈔』・『見聞鈔拔書』を書写する。 長寛寺噫慶と共に能登・越後へ御書演達のために下る。 長寛寺噫慶と共に越後・能登より帰洛する。	〔粟津〕 〔同合本奥―真聖〕
一六七七	延宝五年	三十四歳	六月 十二月二十日	『作業持勸鈔』二巻を撰述する。 八尾大信寺にて『譬喻章』一卷を草しはじめ。	〔典故〕 〔譬喻章奥〕
一六七九	延宝七年	三十六歳	五月七日	『浄土真宗指帰』一卷を草する。	〔浄土真宗指帰奥〕
一六八〇	延宝八年	三十七歳	十二月十二日	門徒の請によつて京都西福寺に入る。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
一六八二	天和二年	三十九歳	八月 九月	『鎖動用心述意鈔』一卷を草する。 『言南無者宗要文』一卷を草する。	〔鎖動用心述意鈔奥〕 〔言南無者宗要文奥〕〔典故〕
一六八三	天和三年	四十歳	九月二十一日 閏五月一日 六月	『第十八願成就宗要文』一卷を草する。 延宝五年に草しはじめた『譬喻章』一卷を草しおわる。 これより先、賀府の養寿院が上洛し、坊官の粟津大進に惠空の堂僧を免じ、彼の学を保護するよう進言、それによつて、出堂給仕の役を免ぜられる。 『経釈拔萃』一卷を撰述する。	〔第十八願成就宗要文奥〕〔典故〕 〔譬喻章奥〕 〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕 〔経釈拔萃奥―略〕

一六八四	貞享一年	四十一歳	秋	<p>籠って藏経を周覽し、その要を集める。</p> <p>まず、梅尾の経藏をみんとして、数年をかけてはじめてゆるされる。</p> <p>しかし浄土部が少なかったため、次ぎに二尊院の藏経をみようととして、玄誓と共に三年がかりでようやく見ることを許される。そして、『漢語燈録』を発見することとなる。</p> <p>『阿弥陀因行記』二巻を撰述する。</p> <p>『不退義記』二巻を撰述する。</p> <p>『鼠雀問答』一巻を撰述しおわる。</p> <p>『観無量寿経義記』一巻を撰述する。</p> <p>『和讃・十七ヶ條』を撰述する。</p>	<p>〔阿弥陀因行記奥〕</p> <p>〔便覽〕</p> <p>〔鼠雀問答奥〕</p> <p>〔和讃・十七ヶ條奥〕</p>
一六八五	貞享二年	四十二歳	—	『自力他力事』を撰述する。	〔自力他力事奥〕
一六八六	貞享三年	四十三歳	四月十四日	『讀仏慈悲集』二巻を撰述する。 <p>『感嘆鈔』一巻が撰述・開板される。</p> <p>『説聴要文』一巻が刊行される。</p> <p>貞享四年撰『讀仏慈悲集』が開板される。</p> <p>『女院御鈔』を撰述する。</p> <p>『淨土文類聚鈔』を撰述する。</p>	<p>〔便覽〕〔真匠〕</p> <p>〔感嘆鈔奥〕</p> <p>〔女院御鈔奥〕</p> <p>〔淨土文類聚鈔奥〕</p>
一六八七	貞享四年	四十四歳	五月三日	『御影像記』一巻を撰述する。 <p>義山良照讃銘の『二河白道譬喩の画』に裏書きをする。これより先に『漢語燈録』を発見か？</p> <p>『選撰集延書』が刊行される。</p> <p>『蓮如上人御物語聞書』一巻を撰述する。</p>	<p>〔御影像記奥〕</p> <p>〔那史・字報〕</p> <p>〔選撰集延書奥〕</p> <p>〔蓮如上人御物語奥〕</p>
一六八八	貞享五年 (九月二十日改元)	四十五歳	十月八日	—	—
一六八九	元禄二年	四十六歳	一月十二日	—	—
一六九〇	元禄三年	四十七歳	三月	—	—

西曆	和号	年令	月日	事蹟	典拠文献
一六九二	元禄五年	四十九歳	七月	京都西福寺を辭し幽栖に卜する。後に洛外の猪熊・洛東の御幸町に住する。	(空状)(師伝)(略伝)
一六九三	元禄六年	五十歳	八月	「選択集叢林記」(第一卷目)を起草する。	(選択集叢林記奥)
一六九四	元禄七年	五十一歳	八月五日	八月起草の「選択集叢林記」(第一卷目)を草しおわる。	(選択集叢林記奥)
			一月	貞享二年撰の「不退義記」一巻が開板される。	(不退義記奥)
			六月	「他力領解鈔」一巻が開板される。	(他力領解鈔奥)
			十月	法蔵坊撰「本願寺七條鏡」一巻を写す。	(本願寺七條鏡奥)
			十二月九日	「古本漢語燈」第十巻を校合しおわる。	(古本漢語燈奥)
			十月十五日	「本願寺系図並訴状之写」を写す。	(本願寺系図並訴状之写奥)
				「御文章」を写す。	(御文章奥)
				「忠心僧都行状記」一巻を撰述する。	(典志)
				「小僧指南集」一巻が撰述・開板される。	(典志)
				「元享積書私考」一巻を撰述する。	(便覧)
				「知恩講式」を写す。	(知恩講式奥)
				「御文章」を写す。	(御文章奥)
一六九一	元禄四年	四十八歳	二月二十八日	父信空(七十五歳)を失う。	(空状)(師伝)(略伝)
			十二月	「部合」を写す。	(真聖)
				「形像専用鈔」を写す。	(形像専用鈔奥)
				「四十八願鈔」を写す。	(便覧)
				「善立寺書籍目錄」序・郡史・学報	(善立寺書籍目錄)
				「選択集叢林記」(第一卷目)を起草する。	(選択集叢林記奥)
				「不退義記」一巻が開板される。	(不退義記奥)
				「他力領解鈔」一巻が開板される。	(他力領解鈔奥)
				法蔵坊撰「本願寺七條鏡」一巻を写す。	(本願寺七條鏡奥)
				「古本漢語燈」第十巻を校合しおわる。	(古本漢語燈奥)
				「本願寺系図並訴状之写」を写す。	(本願寺系図並訴状之写奥)

事蹟

典拠文献

一六九五	元禄八年	五十二歳	六月十八日	惠孝本『選択集』が開板される。 『異執決疑集』上巻を起草する。	〔刊行年表〕 〔異執決疑集上巻〕 〔序〕
一六九六	元禄九年	五十三歳	四月二十五日	『選択集叢林記』八巻を撰述しおわる。 四十八願を講ずる。	〔便覧〕 〔選択集叢林記奥〕 〔四十八願開義鈔〕 〔奥〕 〔略年表〕
一六九七	元禄十年	五十四歳	四月二十五日	『四十八願開義鈔』一巻がなる。(門人の行感の筆録)	〔奥〕 〔略年表〕 〔四十八願開義鈔〕 〔奥〕 〔略年表〕
一六九八	元禄十一年	五十五歳	五月三十一日	『叢林集』九巻を草しおわる。	〔叢林集奥〕
			八月	義山本『古本漢語燈』第七巻を書写しおわる。	〔古本漢語燈奥〕 〔略年表〕
			九月五日	『古本漢語燈』第八巻の校合をおわる。	〔古本漢語燈奥〕 〔略年表〕
			十二月中旬	『古本漢語燈』第三巻を書写しおわる。	〔古本漢語燈奥〕 〔略年表〕
			十二月十九日	宗哲撰『本願寺御代之事』一巻を書写する。	〔本願寺御代之事奥〕 〔略年表〕
			—	寛文七年撰『浄土釈疑集』が開板される。	〔便覧〕
一六九九	元禄十二年	五十六歳	六月	『真宗要論雜記』一巻を撰述する。	〔真宗要論雜記奥〕
			九月十二日	『三帖和讃文義閑』一巻を草す。	〔三帖和讃文義閑奥〕 〔略年表〕
			十一月	『浄土論註叢林誌』二巻を撰述する。	〔浄土論註叢林誌奥〕 〔序〕

西曆	和号	年齢	月日	事蹟	典拠文献
一七〇〇	元禄十三年	五十七歳	二月	『浄土論註科本』二卷を撰述する。 『専修専念鈔』二卷が開板される。	〔便覧〕 〔専修専念鈔奥〕 〔刊行年表〕
			夏	『浄土論註』を拜講する。	〔論註科本奥〕略年表
一七〇一	元禄十四年	五十八歳	六月十二日	『観經玄義分叢林鈔』五卷を著わす。	〔観經玄義分叢林鈔奥〕
			七月三十日	『貴迹大略』一巻を草しおわる。	〔貴迹大略奥〕
			十一月	『事書』一巻を書写しおわる。	〔事書奥〕
			春	恵暁が門人となる。	〔空状〕
一七〇二	元禄十五年	五十九歳	一月中旬	『阿弥陀經義要』二巻を撰述する。	〔阿弥陀經義要序〕
			七月五日	『集古雜編』二巻を草しおわる。	〔集古雜編奥〕
一七〇三	元禄十六年	六十歳	二月晦日	『御葬礼実録集』を書きおえる。	〔御葬礼実録集奥〕
			三月十九日	娘柳(九才)を失う。法名を妙幻と号する。	〔空状〕(師伝)(略伝)(得生極樂義)(新修仏像記序)
			三月三十一日	娘妙幻を失った愁情より、『得生極樂義』一巻を草する。	〔得生極樂義奥〕
			四月	『正信偈』を講ずる。	〔正信偈略述奥〕
			七月十日	四月に講じた『正信偈』を『正信偈略述』として著わす。	〔正信偈略述奥〕
			七月十三日	娘妙幻を失った愁情より願っていた阿弥陀立像が新像される。	〔新修仏像記序〕
			七月十五日	阿弥陀立像に父信空、娘妙幻の遺骨を収め、『新造阿弥陀仏形像記』(『新修仏像記』)一巻を草す。この時より『得岸』と号する。	〔空状〕(師伝)(略伝)(新修仏像記)
				寛文四年撰『正信偈文林』が開板される。	〔国総〕
一七〇四	宝永二年 (三月十一日改元)	六十一歳	一月七日	『阿弥陀經分科』一巻を撰述する。	〔阿弥陀經分科奥〕
				母妙善を失う。	〔郡史〕
一七〇五	宝永三年	六十二歳	六月一日	『御絵伝視聴記』二巻を撰述する。	〔御絵伝視聴記奥〕

一七〇六	宝永三年	六十三歳	夏	近江の即得寺の理寛が門人となる。 天和二年撰『鎮勸用心述意鈔』、延宝五年撰『作業持勸鈔』二巻が開板される。	〔玄義分叢林鈔奥〕 〔便覧〕〔真匠〕
一七〇七	宝永四年	六十四歳	四月	河州の深広院の請により大信寺において『浄土論註』を講ずる。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
一七〇八	宝永五年	六十五歳	四月 六月二十四日 六月十七日	『堅田明誓記』を書写する。 『御文歎喜鈔』二巻を著わす。 『論註辨記』を撰述する。 『順彼仏願記』一巻を草する。 『安心決定鈔翼註』三巻を撰述する。 浪華の高木宗賢が、天滴の本泉蘭若での講釈の許可を本山に訴える。	〔堅田明誓記奥〕 〔御文歎喜鈔奥〕 〔国総〕 〔順彼仏願記奥〕 〔安心決定鈔翼註奥〕 〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕
一七〇九	宝永六年	六十六歳	四月十五日 六月 十一月 十二月	高木宗賢の請により天滴の本泉蘭若にて『撰択集』を講ずる。 『大経分科』二巻を草する。 天滴本泉寺・大阪光徳寺を首として僧門十七人と高木宗賢とに三部経の講読を請われる。 『無量寿経開義』〔大経開義〕六巻を起筆しはじめる。	〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕 〔大経分科奥〕〔略年表〕 〔大経開義奥〕〔郡史・学報〕 〔大経開義奥〕〔郡史・学報〕
一七一〇	宝永七年	六十七歳	三月 一月二日	『蓮如上人御一代記』を書写する。 『撰州野田村御書考』を撰する。 『観無量寿経分科』一巻を撰述する。	〔撰州野田村御書考奥〕 〔観無量寿経分科奥〕

西暦	和号	年令	月日	事蹟	典拠文献
一七一一	正徳二年	六十八歳	二月	天満の本泉寺にて『観経』、『小経』を講ずる。	(空状)師伝(略奥) (観経叢林解奥)
			二月	美濃光照寺の惠舜が天満の本泉寺にての講義を聴講して、その門に入る。	(観経叢林解奥)
			六月十一日	『三帖和讃報恩鈔』六巻を草する。	(三帖和讃報恩鈔—略年表)
			七月二十九日	門弟理寛に元禄十四年撰の『貫迹大略』一卷を与える。	(貫迹大略奥)
			—	『叢林集要文』三巻が撰述・開板される。	(便覧(真匠))
			—	寛文七年撰『浄土釈疑集』が刊行される。	(便覧(真匠))
			—	元禄十五年撰『阿弥陀経義要』が開板される。	(便覧(真匠))
			—	二月の天満の本泉寺での講義の聞書が『観無量寿経鹿聞隨筆』五巻としてなる。	(便覧)
一七二二	正徳三年	六十九歳	三月	『浄土和讃』二十一首抄が開板される。	(浄土和讃二十一首抄奥)
			五月二十九日	『正像末和讃』を講ずる。	(正像末和讃解奥)
			—	(『三帖和讃解』五巻の中の『正像末和讃解』となる。)	
			—	『和讃略註』(二十四首抄)一巻が刊行される。	(和讃略註奥)
一七二三	正徳三年	七十歳	四月十二日	『法事讃叢林解』一巻を撰する。	(法事讃叢林解奥—略年表)(典志)

一七二四	正徳四年	七十一歳	五月二十五日	『観念法門叢林解』一卷を草しおわる。	〔観念法門叢林解 奥—略年表〕〔典 志〕
一七二五	正徳五年	七十二歳	六月一日	『般若讃叢林解』一卷を著わす。	〔般若讃叢林解奥 —略年表〕
			六月一日	『往生礼讃叢林解』一卷を撰する。	〔往生礼讃叢林解 奥—略年表〕
			一月二十九日	天満の本泉寺において、『三帖和讃』を講ずる。	〔空状〕〔師伝〕〔略 伝〕
			二月	惠然（二十一歳）が門下に入る。	〔沿革略〕
			四月二十六日	『三帖和讃解』五巻を草しおわる。	〔三帖和讃解奥〕
			四月	宝永二年撰『御絵伝視聴記』が開板される。	〔御絵伝視聴記奥〕
			四月	『往生礼讃』を洛陽で開講する。	〔往生礼讃開書奥 —略年表〕
			五月十六日	『正信偈私考』一卷を草しおわる。	〔正信偈私考奥〕
			五月	四月二十六日開講の『往生礼讃』の講義をおわる。	〔往生礼讃開書奥 —略年表〕
				寛文十三年撰『浄土疑問解』が開板される。	〔浄土疑問解奥〕
				『疑問釈答』がなる。	〔真匠〕
				天満本泉寺で『具疏』を講ずる。	〔国総〕
			十月十九日	真如上人の命によつて深諦院殿において、『大経和讃』を講ずる。	〔空状〕〔師伝〕〔略 伝〕
			十月二十一日	命を受ける。	〔空状〕〔師伝〕〔略 伝〕
				天満本泉寺において、『観経疏玄義分・序分義』を講ずる。	〔空状〕〔師伝〕〔略 伝〕
				天和二年撰『鎮勸用心速意鈔』が宝永三年につき再刊される。	〔便覧〕〔真匠〕

西暦	和号	年令	月日	事蹟	典拠文献
一七二六	享保一年 (六月二十二日改元)	七十三歳	二月 四月十五日	<p>圓翁、惠空の門に入る。</p> <p>貞享一年撰『阿弥陀因行記』が開板される。</p> <p>尊命を拜し『無量寿経』を講ずる。</p> <p>寛文十三年撰『浄土和讃二十一首抄』が刊行される。</p>	<p>川那辺家系図(略年表)</p> <p>〔阿弥陀因行記奥〕 〔便覧〕 〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕</p>
一七一七	享保二年	七十四歳	五月十八日 六月二十日 六月二十二日 六月二十九日	<p>講堂において『観経』を開講する。</p> <p>十八日開講の『観経』を講じ終わる。</p> <p>講堂において『阿弥陀経』を開講する。</p> <p>二十二日開講の『阿弥陀経』を講じおわる。</p> <p>五月十八日より六月二十日までの『観経』の講義が『観経開林』としてなる。</p>	<p>〔観経開林奥〕 〔観経開林奥〕 〔阿弥陀経開記奥〕 〔阿弥陀経開記奥〕 〔観経開林奥〕</p>
一七一八	享保三年	七十五歳	——	<p>六月二十二日から二十九日までの『阿弥陀経』の講義が『阿弥陀経開記』(『阿弥陀経註辨』)としてなる。(門人惠成の筆録)</p> <p>『親鸞聖人雑事』が開板される。</p>	<p>〔国絵〕 〔刊行年表〕</p>
一七一九	享保四年	七十六歳	四月一日	<p>元禄十一年撰『叢林集』、『真宗仮名聖教目録』が開板される。</p> <p>講堂において『愚禿鈔』を開講する。</p> <p>延宝五年撰『譬喻章』が刊行される。</p> <p>この日より学寮で『撰択集』を開講する。</p>	<p>〔愚禿鈔開書奥〕 〔便覧〕〔真匠〕</p>
			四月	<p>浪華の本坊において『阿弥陀経』を開講する。</p>	<p>〔撰択集開記首題下〕</p>
			八月	<p>天満本泉寺において『浄土文類聚鈔』を講ずる</p>	<p>〔空状〕〔師伝〕〔略伝〕</p>
			秋	<p>宗主より安陀衣を拝領する。</p>	<p>〔空状〕</p>

一七二〇	享保五年	七十七歳	七月下旬	四月の学寮での講義が『選択集講義』七巻としてなり、この年に開板される。 天満本泉寺において『浄土文類聚鈔』を講ずる。	〔便覧〕〔真匠〕
一七二一	享保六年	七十八歳	四月中旬	高木宗賢の七回忌にあたり、その息子の請によって天満本泉寺にて『観経疏定善義・散善義』を講ずる。	〔浄土文類聚鈔叢林解奥〕
			八月	長浜にて『三帖和讃』を開筵する。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十月二日	長浜での『三帖和讃』の開筵を終了する。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十月五日	長浜より帰洛する。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十月二十八日	宗主より尊命として「記録編集」のことをおおせつかる。	〔空状〕
			十月三十一日	「記録編集」のことを終えて自ら本山に持参する。	〔空状〕
			十二月五日	夜 急に病氣の情となる。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十二月七日	全く食事をとらなくなる。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十二月八日	午後 示寂する。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十二月十日	七條において葬送する。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十二月十一日	遺骨を拾う。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕
			十二月二十七日	享保四年に恵空に下した安陀衣を、直弟恵春に下しおく尊命が下る。	〔空状〕〔師伝〕〔略〕

西曆	和号	年令	月日	事蹟	典拠文献
一七三二	享保七年		一月二十二日	西蓮寺惠暁が『惠空老師行状記』一卷を撰述する。	〔惠空老師行状記 奥〕
一七三一	享保十六年		—	惠空撰『説法筌言鈔』三巻が開板される。	〔便覧〕〔真匠〕
一七六六	明和三年		十二月六日	寛文四年撰『正信偈文林』が刊行される。	〔国誌〕
一七六九	明和六年		八月十五日	義空が『惠空老師行状記』を書写する。 西福寺後住の惠敏が、『惠空老師行状記』によって『得岸和上一期記』一卷を撰する。	〔空状奥〕
一七七〇	明和七年		—	惠空撰の『真宗安心消息』、『真宗安心芳談』の二巻が刊行される。	〔便覧〕
一七七三	安永二年		—	惠空撰の『善光寺如来御説法試解』が刊行される。	〔沿革略〕
一七八〇	安永九年		—	惠空に内陣班が贈られ、『光遠院』の院号を賜わる。	〔教行信証御自釈 奥〕〔便覧〕
一八七〇	明治三年		五月七日	学寮において惠空講師百五十回忌の法要をいとなむ。	〔上首〕
一八八〇	明治十三年		—	惠空撰『叢林集』が白川慈撰校訂によって『真本叢林集』六巻として刊行される。	〔便覧〕
一九〇〇	明治三十三年		十月二十日	惠空撰『御文歎喜鈔』二巻が刊行される。	〔御文歎喜鈔奥〕
一九一〇	明治四十三年		—	惠空撰『親鸞聖人雑事』が『親鸞伝叢書』の中に所収されて刊行される。	〔親鸞伝叢書〕
一九二四	大正十三年		三月十六日	生寺善立寺において、惠空師二百年忌法要が勤修され、関係書籍の記念展観が行われる。	〔郡史・学報〕

(註記1) 『惠空老師行狀記』には、父信空の没を「元禄四年二月晦」としてあるのに、『慧空講師伝』、『惠空師略伝』には、「元禄四年春三月晦」となっている。

(註記2) 『惠空老師行狀記』には、享保四年秋に、宗主より安陀衣を拝領したとあるが、『慧空講師伝』、『惠空師略伝』には、享保五年春のことと記されてある。

〔『慧空講師伝』〕

「享保四年秋ノ頃尊命トシテ當家歴代ノ傳記ヲ編マセラル。翌年春篇ヲ終フ。弟子理寛筆授ス。即チ持シテ是ヲ奉ル。時ニ尊命トシテ手カラ安陀衣ヲ拝領ス。」

しかし、『惠空老師行狀記』には、「享保四年秋ノ頃」云々に相当するような記述はない。従つて、本年譜ではこの記述を記さなかつた。

四 惠空撰述関係一覧・惠空写伝本一覧

〈凡例〉

一、この二部は、先掲した「関係資料一覧」の資料にもとづいて作成した。

一、惠空撰述関係一覧は、惠空の著述・講述開書・編著等を一覧にしたものである。

一、書名等の配列は、撰述あるいは開板・刊行年順にした。撰述・開板等の年次の不明なものは、最後に順不同でならべた。

一、惠空写伝本一覧は、惠空が書写したと伝えられているものを、その書写年代順にならべ、書写年代の不明なものは最後に順不同でならべた。

一、撰述関係一覧も写伝本一覧も、左記の略称を用いて記した。

撰：撰述年次。

写：書写年次。

別…内題と外題とが異っている場合などの名称。

版…開板あるいは刊行された年次。

所…活字化されて、刊本に所収されている場合のその書名。

典…実際にその資料にあたれず、参考資料を典拠としてここに記載したものに、その典拠資料名を、先に記した略称を用いて標示した。

蔵…所蔵場所を記し、主に大谷大学図書館に所蔵されているものを中心にしてあげた。

。大谷大学図書館に所蔵されていないものは、その所蔵場所を一ヶ所のみ記した。

。特に自筆本の所在のあきらかなものは、その所在場所をも記した。

。自筆本には、自筆本と記し、写本で、書写人名、年次のあきらかなものはそれを記した。写本としか記してないのは、書写人名・年次が不明なものである。また版本で、刊行年次のあきらかなものはそれを記した。

※…註記

〔惠空撰述関係一覽〕

資料名 冊卷数		略称
『正信偈文林』 一冊		寛文四年 『正信念仏偈文林』 享保十六年 『真宗全書』 竜谷大学 版本 「国総」
『浄土釈疑集』 二卷		寛文七年 元禄十一年・正徳一年 『真宗全書』
『観経疏玄義分科』 一冊		大谷大学 写本（元禄十一年正法寺玄為書写） 寛文十二年 大谷大学 自筆本
『三帖和讃科』 一卷		寛文十二年 大谷大学 写本（宝永四年書写）
『観経玄義分傍証』 一卷		寛文十二年 「先著補」・「便覧」
『浄土疑問解』 一卷		寛文十三年 正徳四年 『真宗全書』 大谷大学 版本（正徳四年版）
『浄土和讃二十一首抄』 一冊		寛文十三年 正徳二年・享保一年 大谷大学 自筆本 写本（元禄十四年定果書写）
『作業持勸鈔』 二卷二冊		延宝五年

資料名 冊卷数	略称	
『譬喻章』 一冊	蔵版別	『一形仏恩作業持勸鈔』 宝永三年 大谷大学 版本（宝永三年版） 延宝五年
『浄土真宗指帰』 一冊	蔵版別	延宝七年 大谷大学 写本（正徳一年義空書写） 享保三年 大谷大学 版本（享保三年版）
『鎮勸用心述意鈔』 一冊	蔵版撰	延宝七年 大谷大学 写本（宝永二年恵暁書写） 天和二年 宝永三年・正徳五年 大谷大学 写本（宝永二年恵暁書写）
『言南無者宗要文』 一冊	蔵版撰	天和二年 大谷大学 版本
『第十八願成就文宗要文』	蔵版撰	天和二年 大谷大学 版本
『経釈拔萃』 一卷	撰	天和三年 『略年譜』
『阿弥陀因行記』 一二卷二冊	撰	貞享一年 享保一年 大谷大学 写本（哀保二年知聞書写） 版本（享保一年版）
『不退義記』 二卷二冊	撰	貞享二年 元禄七年 大谷大学 版本（元禄七年版）
『観無量寿経義記』 一卷	撰	貞享三年

『讚仏慈悲集』 二卷二冊	撰	貞享四年	「先著補」・「便覧」
『感嘆鈔』 一卷	撰	貞享五年 大谷大学 版本	
『説聴要文』 一冊	※ 蔵版	貞享五年 大谷大学 写本・版本 『讚仏慈悲集』 付録	
『御影像記』 一冊	撰	貞享五年 大谷大学 版本	
『選択集延書』 二冊	蔵版	元禄二年 大谷大学 自筆本	
『恵心僧都行状記』 一卷	撰	元禄三年 大谷大学 写本	
『小僧指南集』 二卷二冊	撰	元禄三年 『浄土真宗小僧指南集』	
『元享釈書私考』 一卷	蔵所	『統真宗大系』 大谷大学 版本（元禄三年版）	
『選択集叢林記』 八卷	撰	元禄三年 自筆本 元禄六年から元禄九年 『真宗全書』	
『他力領解鈔』 二卷二冊	別蔵	大谷大学 写本 『真宗安心他力領解鈔』・『領解鈔』	

資料名 冊巻数	略称	
『選択集』	版	元禄七年 大谷大学 写本（元禄十四年休是書写） 版本（元禄七年版）
『異執決疑篇』 三卷	典	元禄七年 「刊行年表」
『次第編』 二卷一冊	撰	元禄八年 大谷大学 写本（大正三年上・中・二卷のみ書写、下卷は欠） 『真宗全書』・『続真宗大系』
『四十八願聞義鈔』 一冊	撰	元禄八年 大谷大学 自筆本 『集古雜篇』の稿本
『叢林集』 九卷	撰	元禄十年 竜谷大学 写本 「国総」
『真宗要論雜記』 一冊	撰	元禄十一年 「浄土真宗叢林集」 享保二年 『真宗全書』・『続真宗大系』 大谷大学 版本（享保三年版）
『三帖和讃文義閑』 一卷	撰	元禄十二年 大谷大学 写本
『浄土論註叢林誌』 二卷一冊	撰	元禄十二年 「先著」・「便覧」・「真匠」
『浄土論註科本』 一冊	撰	元禄十二年 大谷大学 写本 「先著」・「便覧」

『專修專念鈔』 二卷二冊	撰	元禄十三年 大谷大学 版本
『觀經玄義分叢林鈔』 五卷五冊	撰	元禄十四年 大谷大学 写本(宝永二年理寛書写)
『貴迹大略』 一冊	撰	元禄十四年 『真宗全書』 大谷大学 自筆本・写本
『阿弥陀經義要』 二卷四冊	撰	元禄十五年 正徳一年 大谷大学 版本(正徳一年版)
『集古雜篇』 二卷二冊	撰	元禄十五年 『真宗全書』 大谷大学 写本
『御葬礼実録集』 一冊	撰	元禄十六年 大谷大学 写本(享保十六年義空書写)
『得生極樂義』 一冊	撰	元禄十六年 大谷大学 写本(大正九年書写) 西福寺 自筆本
『正信偈略述』 一冊	撰	元禄十六年 『正信念仏偈略述』 『真宗全書』 大谷大学 写本
『新造阿弥陀仏形像記』 一冊	別撰	元禄十六年 『新修仏像記』・『仏像記』 大谷大学 写本(休是書写) 善立寺 自筆本
『阿弥陀經分科』 一卷	撰	宝永一年 大谷大学 写本(享保二年十二月十七日恵山書写)

	資料名 冊卷数	略称
『御伝絵視聴記』	四卷	撰 宝永二年 正徳四年
『御文歎喜鈔』	二卷一冊	撰 宝永四年 『真宗大系』 版本（正徳四年版）
『論註辨記』	二冊	撰 宝永四年 明治三十三年 大谷大学 版本（明治三十三年版）
『順彼仏願記』	一冊	撰 宝永五年 大谷大学 林山文庫写本（昭和十二年三枝勇勝書写）
『安心決定鈔翼註』	三卷三冊	撰 宝永五年 『真宗全書』 大谷大学 写本
『大無量寿経分科』	二卷二冊	撰 宝永六年六月 大谷大学 写本（明和四年惠山書写）
『無量寿経開義』	六卷六冊	撰 宝永六年 『大経開義』・『大経要義』 善立寺 「展日」
『選択集義述』	十卷	撰 大谷大学 写本（第四・六卷次）
『撰田野田村御書考』	一冊	撰 ※ 宝永六年の講議の西秋筆録 宝永七年一月二日 大谷大学 写本（義空書写）
『観無量寿経分科』	一卷	撰 宝永七年 大谷大学 写本（惠山書写）
『観無量寿経叢林解』	三卷六冊	撰 宝永七年

『三帖和讃報恩鈔』 六卷	蔵	大谷大学 写本
『叢林集要文』 三卷三冊	撰	正徳一年 「便覧」・「真匠」
『観無量寿経魚随筆』 五卷	蔵版	正徳一年 大谷大学 版本
『和讃略註（二十四首和讃抄）』 一卷	別	正徳一年 大谷大学 写本
『法事讃叢林解』 一卷	蔵版	『三帖和讃略註』 正徳二年 大谷大学 版本（正徳二年版）
『観念法門叢林解』 一卷	撰	正徳三年 「典志」・「先著」・「便覧」・「真匠」
『般若讃叢林解』 一卷	撰	正徳三年 「典志」・「先著」・「便覧」・「真匠」
『往生礼讃叢林解』 一卷	撰	正徳三年 「典志」・「先著」・「便覧」・「真匠」
『三帖和讃解』 五卷五冊	撰	正徳四年 大谷大学 写本（照空書写）
『正信偈私考』 一卷一冊	蔵	正徳四年 大谷大学 写本
『疑問釈答』	撰	正徳四年 竜谷大学 「国総」

		資料名 冊卷数		略称	
『親經開林』	四卷四冊	撰	享保二年 大谷大学 写本（利円書写）		
『阿弥陀経聞記』	一冊	撰	享保二年六月講義、門人惠成の筆録 『阿弥陀経誌辨』		
『親鸞聖人雄事』	一卷	所蔵	『真宗全書』 大谷大学 写本（桑門惠成の書写）		
『真宗仮名書目録』	一卷	所蔵	享保二年 『親鸞伝叢書』 大谷大学 版本（『親鸞伝叢書』所収）		
『選択集講義』	二卷七冊	撰	享保四年 大谷大学 写本（順達書写）		
『浄土文類聚鈔叢林解』	五卷五冊	撰	享保五年 大谷大学 写本		
『説法筌言鈔』	三卷三冊	蔵	享保十六年 大谷大学 版本		
『真宗安心消息』	一冊	蔵	明和七年 大谷大学 版本（明和七年版）		
『真宗安心芳談』	一冊	蔵	明和七年 大谷大学 版本（明和七年版）		
『善光寺如来御説法試解』	一冊	蔵	安永二年 大谷大学 版本（安永二年版）		
『教行信証御自釈』	一冊	別版	『顕教行信証文類御自釈』 安永九年		

『無量寿経講義』	三卷三冊	蔵	大谷大学 版本(安永九年版)
『大経開書』	五冊	蔵	大谷大学 図書館目録には、「惠空撰か?」となっている。
『観無量寿経聴記』	六冊	蔵	善立寺 「展目」
『観無量寿経開書』		蔵	竜谷大学 「国総」・「先著補」・「真匠」
『観経序分義叢林鈔』	一卷	蔵	「国総」には、大谷大学所蔵とあるが、現在不明。
『観経定善義叢林鈔』	二卷	蔵	大谷大学 写本(宝永二年理寛書写)
『観経散善義叢林鈔』	三卷	蔵	「観経定善義説解」 大谷大学 写本(宝永二年理寛書写)
『観経玄義分愚聞記』	八卷八冊	蔵	大谷大学 写本(宝永二年理寛書写)
『観経玄義分志己鈔』	四卷	※	門弟西秋の筆録。
『観経四帖疏玄義分抄』	五卷	蔵	竜谷大学 写本 「国総」・「先著補」・「便覧」・「真匠」
『観経疏玄義分講録』		蔵	「典志」・「先著」・「便覧」・「真匠」
『歎徳文称揚鈔』		蔵	「国総」には、大谷大学に写本所蔵とあるが、現在不明。
『五帖消息叢林集』	三卷	蔵	「先著補」・「便覧」・「真匠」
『正信念仏偈講説』	一冊	蔵	「典志」
『正信偈講録』	一冊	蔵	大谷大学 写本(寛保三年)
『愚禿鈔閉書』	一卷	蔵	竜谷大学 「国総」・「先著補」・「便覧」・「真匠」
『浄土文類聚鈔私科』	一冊	蔵	大谷大学 写本(理寛書写) 「浄土文類聚鈔私科解」
『浄土文類聚鈔講録』	二卷	蔵	大谷大学 写本(享保十八年義空書写)
『浄土文類聚鈔略記』	一卷	蔵	「典志」・「先著」・「便覧」・「真匠」 「先著」・「便覧」

	資料名 冊巻数	略称
『三帖和讃科本』	四巻	「便覧」・「真匠」
『浄土讃抄』	三冊	善立寺 自筆本 「展目」
『高僧讃抄』	二巻	善立寺 自筆本 「展目」
『和讃並十七ヶ條』	一冊	善立寺 自筆本 「展目」
『科和讃』	四冊	「国総」に、「享保書籍目録」によるとあり。
『第十七・十八・十九・二十願釈』	一冊	「先著」・「便覧」・「真匠」
『善立寺書籍目録』	一冊	善立寺 自筆本 「展目」
『親鸞聖人御系譜並年譜』	一冊	福井県祐善寺（蜂屋良潤写） 「国総」・「先著補」・「便覧」・「真匠」
『浄土疑問指帰略答』	一巻	「統真宗大系」 「先著補」・「便覧」
『浄土要語』	一巻	「国総」に「元禄書籍目録」によるとあり。
『浄土真宗血脈論』	一巻	「真宗全書」
『念声は一聞書』	一冊	「先著」・「便覧」・「真匠」
『要儀廓解』	一冊	大谷大学 写本（天保三年） 「国総」
『説教指南集』	一冊	「便覧」・「真匠」
『安心問答』	一冊	大谷大学 写本 「典志」
『四帖合註抄』	五巻	「国総」に「享保書籍目録」によるとあり。
『真宗釈疑集』	四冊	大谷大学（惠空筆）
『東本願寺内之図』	一幅	大谷大学（惠空筆）
『山科本願寺旧迹之図』	一幅	大谷大学（惠空筆）

〔惠空写伝本一覽〕

		資料名	冊卷数	略称
		『山雲海月集』	一冊	万治三年 善立寺 自筆本 「展目」
		『末法灯明記』	一冊	寛文一年 善立寺 自筆本 「展目」「真聖」
		『十七條憲法下学集』	一冊	寛文一年 大谷大学 写本 『郡史』・『学報』
		『存覚一期記』		寛文九年 大谷大学 写本
		『念仏往生要義』 『自要鈔』 『選要鈔』 『見聞鈔拔書』	合二冊	寛文十二年九月二十五日 善立寺 自筆本 「展目」「真聖」
		『和讃』 『十七ヶ條』	合一冊	貞享三年 善立寺 自筆本 「真聖」・「展目」
		『鼠雀問答』	一卷	貞享三年 「兄弟問答」
		『浄土文類聚鈔展書』		元禄二年 大谷大学 写本
		『知恩講式』	一冊	元禄三年 大谷大学 自筆本 『浄土文類聚鈔』を写したものの。

資料名 冊卷数		略称
『蓮如上人御物語聞書』 一冊	蔵	善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」
『形像専用鈔』 一冊	蔵	元禄三年 大谷大学 写本
『二部合』 一卷一冊	蔵	元禄四年 善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」・「国総」
『四十八願鈔』 一冊	蔵	元禄五年 「先著補」「便覧」
『本願寺系図並訴状之写』	蔵	元禄七年 大谷大学 写本
『本願寺七條鏡』 一冊	蔵	元禄七年 大谷大学 写本
『本願寺御代之事』	蔵	元禄十一年 大谷大学 写本
『事書』 一冊	蔵	善立寺 「展目」・「真聖」
『堅田明誓記』	蔵	元禄十四年 大谷大学 写本
『大無量寿経延書』	蔵	宝永四年四月 大谷大学 写本（享保十六年義空書写）
『太子講式』 一冊	蔵	大谷大学 自筆本 善立寺 自筆本 「展目」

『本願寺作法次第』 一冊	蔵	善立寺 自筆本 大谷大学 写本 「展目」
『六部合』 一冊	蔵	大谷大学 写本
『諸縁深知集』 一冊	蔵	善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」
『教化集』 『女人最要集』 合二冊	蔵	善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」
『三心三信同一之事』 『現世利益和讃意合』 合一冊	蔵	善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」
『本願鈔』 一冊	蔵	善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」
『持要鈔』 一冊	蔵	善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」
『最要鈔』 合一冊 『随聞書』 一冊	蔵	善立寺 自筆本 「展目」・「真聖」
『蓮如上人法語』	蔵	大谷大学 写本（開空書写）
『嫡庶問答』	蔵	大谷大学 写本
『東西記』 一卷	蔵	大谷大学 写本
『需答十六條』 一卷	蔵	大谷大学 写本
『真宗仮名聖教』 八十八部八十一冊	蔵	『仮名聖教』 大谷大学 自筆本 詳細には『大谷大学図書館目録』『真聖』(二六四―三五二)を参照。
※ 蔵 別		

付 資料翻刻

『惠空老師行狀記』

当資料翻刻にあたっては、本『紀要』所載の『上首寮日記』凡例に準じた。

(表紙)

淨信庵義空叟

惠空老師行狀記全

惠空老師行狀記

江州金森善立寺

惟夫吾真宗之惠空法師者、姓、川那部氏、近州野州郡金森之人、其先、蓮師常随高弟道西公之後裔、善龍

寺之寺主謂信空之真弟也、正保元甲申年五月十五日、夜子時生焉、

未志^タ学^ク之頃、別^ニ于家兄^ニ、其憂深^ク、而難^レ忍^ニ愁情^ニ之余^リ、心謂^ク、隱^ニ迹^ヲ於他郷^ニ、欲^ス偷^{カニ}出^テ、遠行^ニ、而既而貯^レ糧^ヲ、信聞^レ有^ニ其志^ニ制^シ、以不^レ勉^レ之、平日起居^ヲ令^テ人見^ラス、然^ル尚智^ノ所撼^セ哉、終^ニ十八歲而言^ス信^ニ、州^ノ叡獄^者、天台^ノ傳教^ノ峰^ニ、一函^ヲ藏^{セル}五宗^ノ章疏^ノ之靈山^也、願^ハ登^レ彼^ニ而学^{セト}矣、信知^テ其匪^ラ可^レ繫^ク、而許^ス之、仍攀^テ登^ル彼山^ニ鑽仰^ス、繩錐^ノ之勤^ヲ猶如^ク怒、已^ニ学^フ三年^ヲ焉、而雖^モ如是、善龍^ノ精舍^者本是真宗^ノ靈場、蓮師^ノ已來^ノ法燈^{盛然}、葉々^ノ不^レ消耳、以^テ茲更^ニ宿^ニ因^ニ萌^ニ于内^ニ善緣^ヲ催^ニ于外^ニ、所以^ニ辞^ニ於叡山^ヲ、終^ニ歸^ニ本宗^ニ、実^ニ偶然^ト、心^ニ祖風^ニ、

時東湖有二沙門、号龍溪、本是親識、往
與彼共學、後望京師、隨於誓源寺、円智、学宗
門、奥願也、或時在二近州大津斗敷、或時在二
京兆高倉而伏膺、既読書則歎雪螢之勤尚怠、
破几案者隨倒、弥進乎、

彼円智是一宗之耆老、而淳寧院大僧正鎮賞、円勲
也、然一日、円白言、大僧正、以二空是宗門英、
於茲知二習字切標下給糧録可也、係、依之寬
文十庚戌年二月頃、廿七歲而出堂給仕、僧正異他而
出頭無二也、然、同十一年十月於レ堂許可法譚、從
夫已來衆人拳稟教者甚多、或時記於十七條疑
問、答詢諸方学生、雖二对者一両有之、未得
其本意、故還自答釈、其文于レ今明也、或為レ令
知宗門人無二三業煩、製二領解等三部、謙示
自親族矣、

後由二門葉請、入二于京兆西福寺、維時延宝八庚申
年冬十二月十二日年三十七也、於二于斯開二講筵、會

集者又夥矣、奉二上意到諸邦、歸伏者復不少、
然官禄市廓榮華念々厭之、心叩以伏、乞辭出
堂、上意不聽而經年、有二時賀府、養寿院上洛、
而為二粟津大進、白言、空有閑隙、孜孜勤不懈其
学又去、何処、願許其苦役、遂二天和三癸亥閏五月
朔日四十歲而蒙免也、

仍此年秋、比於二閑窓、周覽藏經、而不生二怠惰之
劣心、間亦筆記而集其要、雖於諸經論釈不也乏、
於二我浄土部未二悉得之、曾聞、梅尾藏高弁已
來所集秘置也、願者開二彼枢鍵、已數年而不
止、所志行一果而得レ開藏、即至見之、浄土
部銘函有櫃、其書多闕而只纔得二三五、惜哉
無乎、復洛西嵯峨、二尊院浄土門本山義、本基也、
聞有古書典、与二玄誓俱步行、請凡及三三年
已而遂其本意、入藏而見之、得二黒谷之漢語燈并
西山耆老、秘書若干卷、所謂黒谷和溪語燈録、是
一宗之本書也、浄学侶豈捨此又如何矣、而和語

燈七卷雖_レ傳_ト世_ニ於_二其_一漢語燈_ニ數百年來不_レ聞_一見者_一、
既_ニ今_一果_ト然_ト而_レ閱_之、是_レ宿習_之之_レ因緣_ト落_レ淚難_レ抑_一、仍_レ弘_ル
世_ニ從_ニ是_一時_ニ起_レ耳_一、

鎮徒隱士義山良照者、一宗_一耆年也、常_ニ与_レ空_一好_シ、
或時照住_レ空_一日、公_一学切不_レ可_レ言_一、恐_{クハ}宗義之勤々
可_レ謂_一、有_レ汝_ニ空_一謂_ク、必_モ不_レ然_一、可_レ恐_レ可_レ慎_レ而已_一、
吾復語_レ公_一、公_一鼻祖之漢語燈世_ニ少_ニ知_ル者_一、吾始_テ
得_レ之_一後世復_知之_一、是_レ勤及_レ人_一可_レ謂_一、幸_ト如何_一、
照諾_ス矣、後照又得_ニ一本_一、參訂_ノ而命_レ劔_一、以_ニ壽梓_一、
而得_ニ於_レ其源_一有_レ空_一耳、空如_レ輕肥樂_一尚不_レ好_レ之_一、唯
如_ニ巖藪_一煙霞_一情而日_ニ飢_レ之_一、

而_ニ元祿四年春二月晦信空七十五歲而卒_一、空聞_テ不_レ
絶_レ忍_一、即_チ走_ニ金森_一茶毗事畢、收骨_ノ而歸_ル于京師_一、
愈出塵_一、志切也、誰_カ豈_得繁_ニ繫_ス耶_一、由_レ是_一翌元祿五
壬申歲秋七月行年四十九已_一而辭_レ寺跡_ト幽栖_ニ後隱_{カニ}
居_ニ于長安_一、猪熊_一亦_住于洛東御幸町_ニ、

時元祿十六癸未天有_ニ一子_一逝_ス、号_ニ妙幻_一、三月十九

日也、恩愛別離_ノ愁情_ハ流淚_ト而_レ実_ニ不_レ撰_ニ於_レ智愚_一者_一哉、
読経念仏日_ニ以為_レ業_ト、愛々_{タル}眼淚_当不_レ能_レ輟_ル、故_ニ
為_ニ薦度_一新刻_ニ於_レ弥陀尺余之立像_一、像中_ニ納_ニ三經七
祖_一要文_并信空妙幻_一遺骨_一、為_レ標_ト納_ニ於_レ要文_一住持_ニ三
宝_一、納_ニ於_レ遺骨_一、本意_ハ有_ニ造惡不善_一、故而_レ自名_ト
号_ニ得岸_一、其_レ記_一卷_ニ伝_ニ于_レ世_一、委_{ハシ}如_レ彼_レ記_一矣、

宝永四丁亥年依_ニ河州深広院殿_一之請_ニ、於_レ彼_レ大信寺_一
講_ニ往生論註_一、同_ク五年頃浪華住人高木氏_{高木氏ハ平野屋五兵衛也、後剃髮}
親厚無_ニ一_一、而訴_ニ于_レ本院_一請_レ令_ニ空_一而講_ニ於_レ天満
本泉蘭若_一、遂_ニ果_レ得_ニ於_レ其期_一、高木氏喜不_レ斜_一、仍_レ宝
永六己丑年夏四月中旬_一、五_於彼_レ蘭若_一開_ニ蓮_一、選_ニ択_ス集_ト、
其_レ后_一庚寅辛卯癸巳甲午乙未_一之歲_ニ於_レ同_レ処_一、如_レ
次_ノ以_ニ大經_一觀_ニ小兩徑_一三帖和讚_一導師_ノ具_レ疏_ト、玄序_分義_ト
講演_焉、凡_レ每_レ儲_レ蓮_一烈衆_一、僧_足于_レ千二百_一、其_レ余
近男近女_一不_レ能_レ知_レ數_一、一日語_レ予_一、獨園_往昔_一之比
丘衆_{千二百五十人}、今_於此_レ席_一纔_ニ闕_ニ五十人_一、豈_不
不思議_一、非_ニ利物偏增_一之宗風_一遠吹_ニ於_レ末法_一万年空_一者

何有^ソ如^レ是集會^ニ邪、所^ハ至^ニ番是祖師之香薰也、酌^ム流^ヲ學士、而不^レ尋^ニ彼^ノ於本源者、不^レ孝之飛^ハ云何為^シ乎、尚^ハ白^ス宗門學者、若^ク於^ニ如^レ是^ノ事^ニ毫^モ募^ハ於自己、所^ト為^ニ祖師痛銜之警^ノ耻^ニ可^レ無^レ地、仰^キ願^ハ不^レ外^ニ此^ノ報恩^ヲ耳、

于茲正德五年冬十月十九日、為^ニ當門跡大僧正上^ニ意^ト、於^ニ深諦院殿^ニ竊^ニ欲^ス召^ノ空講^ヲ、所^ヲ為^ニ難^ク止^ム、而即行^ク殿、於^レ彼^ニ而大僧正始^ト、而連枝^并從^ニ士^ニ已^レ下若干次第^ニ列座^ス、空詣^テ于尊前^ニ、稽首^而白^ク言^ク、每歲之報恩講^ニ於^ニ尊影堂^ニ、有^ニ大衆改悔^ノ出言^一、各述^フ自己領解^一、今愚^カ所^レ述^ル全非^ニ講論^ニ、今日幸^ニ於^ニ大經和讚^ノ上^ニ、奉^レ申^シ愚^カ領解^一、意^ヲ宛^モ擬^ス彼講筵^ニ、詞^ハ俚^キ生得^ノ過也、已^レ而訖^ス、仍^テ同^ニ廿一日大僧正召^ニ本殿^ニ面^ニ、宣言^而白^ク、自^レ今^ニ已^レ往寮內、緇林^ヲ而遣^レ預^レ汝^ニ、依^テ給^ル以^レ祿^一、空辱^ク亦報^ル以^ニ老躬難^ヲ計^ヒ、尚^ハ固辭^ス無^レ地、口^ニ免^ニ錄^耳也、依^テ明^ル享保元^{丙申}年七十三歲而稟^ニ尊命^ト、令^レ領^ニ衆^於名藍^ニ、夏^ニ四月中旬五^於藍^ニ初^テ

講^ニ於^ニ無量壽經^ノ、緇林尤茂^レ不^レ異^ニ于竹葦^ニ、從爾已來、每事有^ニ考事^一者直^ニ召^ニ于本殿^ニ、

或^ハ享保四^{己亥}秋、比^ニ遣^ニ尊命^ト、手^ニ拜^レ領^ル於安陀衣^ヲ、同年夏四月於^ニ浪華^ノ本坊^ニ開^ニ演^ス彌陀經^ヲ、同秋八月於^ニ天滿本泉精舍^ニ講^ニ於^ニ文類聚^ノ、去^ル辛丑^年、當^ニ先年本泉精舍講筵之主宗賢七廻忌^ノ之間、彼^ノ氏息某^ヲ為^レ報^ニ於^ニ爺恩^ノ、往^シ頃^於彼^ノ所^レ講^ニ導師^ノ、五部九卷、內余^ニ定^ス散^ニ義^ヲ、故^ニ今願^ハ彼^ノ二帖^ヲ須^ク有^ニ講演^一矣、仍夏四月中旬又於^ニ本泉寺^ニ開^ニ於^レ彼^ノ二義^ノ二義^ノ、上^レ件皆無^レ不^レ尊命^ニ而已、抑^モ高木氏者親^ニ子^ニ共^ニ雖^レ有^ニ身^ハ世塵^ニ、建^ニ於^ニ數歲之講筵^ノ、本泉蘭若^ニ哉、以^ニ于^ニ殊^ノ首尾成就^{スル}、事^ヲ從^レ今視^レ之^ハ法^ハ興^ニ最^モ高^シ、因^レ緣^以無^レ可^ニ比^キ類^ス者^ハ歟、往^昔須^レ達^ニ真^ニ弘^ノ為^レ緣^ノ、開^ニ祇園說^ヲ、我朝、円照依^テ然^ル師^ノ德^ニ成^ニ於^ニ選^ニ摺^ノ集^ノ、彼^レ此^ニ難^ク殊^ト共^ニ同^ク開^ス成^ス者^ハ恐^レ不^レ凶志^以可^ニ一^{ナル}乎、

又八月於^ニ東湖長浜^ニ講^ニ於^ニ祖師三帖^ノ讚^ヲ、於^ニ二十月二日^ニ畢^ス、即^チ示^シ衆^曰、凡^ソ尋^ニ和漢出家法^ノ、諸^ノ宗各

隨^テ先^ノ師^ニ菴^ス染[、]故^ニ戒^師亦^多、吾^ノ宗^獨繼^雖幾^千萬^一、菴^染師^有于^上一^人、所^謂本^院主^是也、門^弟者^甚可^慎、思^厚恩^不可^欺、以^レ此^將了^了間[、]復^語門^弟言[、]予^講今^以為^レ終^矣、

已^ニ十^月五^日歸^于華^洛、而^同下^旬比^聊有^二微^疾、氣[、]又^同廿^八日^為、尊^命有^二記^錄篇^集、事[、]雖^羅于^時病^痾不^レ辭[、]而^速終^于事[、]記^成晦^日自^持而^奉之[、]歎^哉、疾^漸々^重、雖^レ尺^三醫^療、無^二其^効、人^來問^候、多^告日[、]不^レ期^次日^面謁[、]手^持於^檀子[、]口^稱名^無斷[、]又^每朝^語曰[、]每^夜夢^中與^二學^友來^討論^未絕^學問[、]情^如何^為、嗚^呼憂^哉、一^法其^所言^寄下^哉、一^法問^皆實^事、剩^其義^擾々^{而已}、

復^臘月^五日^夜忽^其疾^病也[、]看^者皆^驚動[、]今^為レ^期、弥^稱名^與息^共而^不レ^止、七^日朝^斷於^食事[、]又^不レ^用藥^湯、口^嘗不^レ語^二世^事、頭^北面^西不^レ動[、]身^手出^呼入^吸皆^念仏^共也[、]八^日朝^猶如^レ入^二禪^定、

至^于未[、]下^刻醫^師闕^レ脈^驚日[、]兩^手心^脈不^レ異^二師[、]平^日、當^于時^不思^議也[、]爾^呼吸^靜而^漸近^于臨^終、聚^二病^床、異^口同^音念^仏而^不レ^輟、即^至于^晡時^竟如^レ眠^而息^絕矣[、]實^享保^六辛^丑冬^十二^月八^日春^秋七^十有^八、道^俗等^隨聞^上着[、]或^遇二^生前[、]或^至二^死後^者作^レ礼^合掌^莫不^レ号^泣、又^十日^於二^七條^奉葬[、]遠^近緇^素群^集不^レ知^其數[、]見^者無^レ不^寄、聞^者無^レ不^尊、同^十一^日拾^遺骨^訖、親^者分^二遺^骨持^歸、古^所謂^朝有^二紅^顏夕^成白^骨ト[、]思^夫忽^然責^二胸^中一^耳、中^隱誦^經念^仏之^聲緇^素互^舉勤^々不^レ息[、]同^廿七^日者^從二^本門^跡以^二已^前所^賜安^陀衣^復即^真弟^惠春^有下^被下^置尊^命上[、]仍^稟承[、]幸^明廿^八日^當三^七日[、]故^春頂^載詣^于靈^前、見^者如^レ值^二師^生平^容儀[、]言^下皆^悲喜^交而^落淚^千行^也、悉^是彼^德風^至滅^後尚^薰盛^者哉[、]

贊^日、德^不レ^孤必^有隣^乎、灰^灰聞[、]去^冬今^上尊^妹秋^子內^親王^奉于^於書^法皇^言、真^宗法^將空^請レ

宮令ニ法ヲ聽受セ、仍テ決レ命ニ、然ルニ空不俟レ而卒ス、
由テ止メ矣、惜哉、今聞レ斯ノ道俗無レ不レ尊、

噫、平日之行狀質直ニ而不レ好レ誇ヲ、椽飯葛湯當レ時テ用レ之、遠遊、道路ニ自執テ屨ヲ、具ニ于奴ニ、不レ厭ニ繩樞一、不レ恥ニ蓑爾一、何此人而聞シ、思ニ夫德風難シ覆稟教之人、誰惡ニ於此一哉、

依レ之願ニ往ルニ、未ニ空足レ入ルニ小河一、引網取レ魚ヲ、其夜夢地藏誠言、汝何害大悲耶何又送我乎、覺後毛豎念以ニ出塵一志ヲ、在ニ于大津一習學、日或師講場ニ、啓ニ三台一、四教儀於ニ彼一、躡空觀ニ師儲其喻大衆一、而空其夜夢有ニ一僧一、問フ誰ト、從ヘル僧ノ日、天台大師、即大師告日、昨ノ講ノ躡空義ハ不レ爾ノ所レ喻ル尚不出ニ折空一、其器不レ動觀是躡空也、覺メ翌朝語ル講師ニ、師驚テ自辱チ改ム、一日從レ京ニ至ニ金森一時ニ信ク、云ク、予欲ニ為レ勸ニ老父一淨安ヲ令ニ法談一而儲レ會ヲ、今幸ニ汝一來ル所以ニ令ニ汝一替テ談セ、仍談シ訖テ信ノ云ク、汝不レ來キ予ノ所レ志ヲ、汝今談レ之、無ニ一ト事一違ニ予一所思ニ、是奇ナル哉、後報ニ祖父淨安一望ニ

集ニ一ノ書篇一其書傳世ニ、

又有ル夢ニ詣ニ六条本堂一時空於レ堂說法ス、說テ了テ過ル庭ヲ、傍ノ人試問レ誰ト、有レ人、答ニ惠空一、傍人返テ曰ク、不爾吾聖人也、有人夢覺兼所レ思今即ニ應レ慶ニ無レ限、

又終焉之前日晡時竟、從ニ西方一白光來テ照ニ毘耶室一面容明ナル勝ル于日中ニ、見ル者奇ト之、從ニ同一臨終之朝、面容宛モ似ニ于祖師病床尊顏一矣、如レ是事甚タ多シ、翰墨以難レ尽雖レ有ニ且一所レ恐ル、唯以ニ隱德一令レ爾ヲ、尚擬ニ彼一可レ信耳、或付日、古所謂夫遁世者吾棄レ世也、又棄ニ吾遁一全者矣、今聞ニ空一遁之後又於ニ世開一講肆一、似レ好ニ名一譽一、似レ何ニ為レ棄レ世耶、今謂我棄レ世々不レ棄レ我ヲ、以テ所レ令レ然レ德ノ、亦為レ遁レ所レ覆ニ無レ弘レ道意一、戻ニ大悲一化レ報恩ニ、豈ニ祖師意一哉、予返問ニ夫嘆ニ辟支一自行一乎、嘆ニ菩薩一、必行一、古ノ有德ノ人師未レ聞レ事ニ蟄居一、自樂一、今寄レ例ニ如レ是一歟、空常ニ厭ニ京市一曰ク、幸近州我能生因緣ノ地也、欲レ隱ニ跡彼一林藪ニ、然人不レ聽サ、況上レ召レ我無地レ辭而今ニ如レ是一矣、壳名ノ之

士、豈同日語、邪、

又于茲、近州善籠、靈場、源、道西遺跡也、彼道西蓮師無二直弟、而玉章、之發起、以西為始、西所得最、初、玉章彼、異場、有于今、世云、御文始、是也、亦於彼里、有苦菜、蓮師常嗜、苦菜与粉豆、以為、旧例、彼里、門葉摘、之饌、每歲二月廿八日、本院祥齋具、即其饌、不壞受、以、歸、金森、仍三月六日、号、苦菜、頭、而施、其日、所詣多衆、以彼、御文与正信、偈大意、拜讀旧儀也、然此儀中絶、之所、貞享之頃、再興、之、以為、恒式、并、伝、于清沢、蓮師、金森本、蓮師遺骨、遺骨懇望、分納、之、同六日、講、人皆、拜、此時、群集超、昔、此紹隆、耶崇、昔、所、致、也、一日詠、日、古郷乃草登契之露、乃身能余所逢爾消哉懸覽、矣、

又或時日、吾常聞、叡山、者即為、親泥、思、夫、前生、可、住、叡麓、又曰、有、間隙、述、近州、府誌、焉、以、是等、謂、近州因縁、深、地、乎、

竊惟、夫空終、於食、無、有、忘、鼻祖、報恩、常所、憂、

有、二宗門之英、亦多走、他門、還昏、自宗義、惜哉、所以、學、他門、者多、之、學、自門、者不、多、何、不、思哉、凡、平日、著、於書、於數十卷、述、二宗門、深奧、令、天下、古今、學者解、其久感、幾、乎、然、所、述書有、或果、而得、治、有、或果、而、不、治、見、焉士、問得、意、又語、日、學士所謂、於、愚禿鈔文類聚抄諸神本懷集等、多、失、義、愚、今、欲、箋註、而無、間隙、不、違、輯修、乎、凡、夫、於、淨家、捷、驟有、玄所謂鎮西西山大谷也、探要各所崇、義、以有異、如、鎮与西、於、諸行、者論、生、不、異、如、大谷、生、不、共、或、許、或、不、許等、雖、有、此等異、亦、不、聞、委、者、而、今、分、三、家義、令、後、學者、不、惑、独、始、斯師、奇哉、非、我宗、彼西鎮學士分義、玄、不、棄、亦空、恩也、故華頂義山粟生、沢了、皆一宗、義籠也、与、空交、如、蘭友、尚重、於法、也、而、下若酌、二、同流、中、還、拒、如、蠟、蠟、者、上、拙哉、徒、為、自、壳名、嘗、不、為、法、謂、欺、不、得、甘、露、返、成、毒、病、弥、增、

今、白、同室、學士、適、有、仰、祖風、之志、以、勿、忘、此

明和三丙戌臘月六日書寫訖 義空恩常

師為法心、身習教信、不乖祖意、德以無可レ比ス
而毫不レ求己名之翔、勤學唯為報恩、嚴惠以二大
悲化、心栖于淨域、無懈念仏、心可レ知、自信、
外全無教人信、疾臥病床、不三手捨念珠、
今往生安養淨土、現成俱會之聖衆、已垂レ慈ラシ
憶我閻浮、大悲、貴哉、賴哉、

于斯貪道去、元祿庚辰、出古郷、至京師、明辛巳
之春、頃初謁此師、今迨于辛丑歲、經於二十一年、
蒙一厥厚恩、取レ諭以無物以レ何擬報恩、嗚呼、
想昔顔容、如レ有今尚目前、念說法声、音々、而
如レ觸レ耳、仰瞻無夫面貌、伏惟又無其音、
是為夢將レ幻、思夫泪連々不レ止也、凡平生
在師前、親以レ有見聞所、今又与誰俱語矣、故
得中陰之節、聊記彼行狀、而以為レ捧尊靈前、
豈不勉焉、酬三師恩哉、然今所誌、唯所以恐、後
廢忘也、云爾、于時享保七年次壬寅春正月廿二日劣
弟惠晁謹而修小祥齋、揮淚書於京兆、東而已、